

2-16-4 郡上八幡城の攻撃

関ヶ原合戦の慶長5年（1600）春に金山城主森忠政が信州海津城に移封された当時の中濃から東濃西部には、郡上に稲葉貞通、武儀鉦尾山に佐藤方政、加茂白川には郡上から左遷され小原に遠藤慶隆・犬地に遠藤胤直の両遠藤氏が配されていた。

美濃の最大大名の織田秀信が石田三成に加担したので美濃の多くの武将は西軍に属した。稲葉貞通は犬山城の石川光吉のもとに、佐藤方政は岐阜の織田秀信のもとに馳せていた。同遠藤氏は慶隆が東軍に組し、胤直は西軍に属するという東西両陣営に分かれた。

8月に入ると犬地の胤直は「上ヶ根」の砦に籠もり慶隆に備え対した。この「上ヶ根砦」の所在については諸説がある。一番有力視されているのが、現白川町切井の「城が根」であるという。それに対して慶隆は佐見の吉田に砦を築いて「上ヶ根」に備えたという。慶隆が旧地の郡上奪取の行動を起こすのは8月28日である。郡上城主稲葉貞通が犬山に在陣中で留守のうちにというわけである。慶隆は飛騨川を渡河し和良から安久田へ出、9月1日に郡上城を飛騨の金森可重の援軍とともに攻撃した。翌2日に和議が成立した。急を聞いた犬山にあった稲葉貞通が3日に郡上に到着し愛宕山の遠藤軍を攻撃し激戦となったという。4日再び和議が成立し両軍は兵を収めた。

慶隆は東濃へ兵を戻し5日に胤直の籠もる上ヶ根の砦を囲み、軽戦のうちに岐阜・犬山等の近況を知らせ東軍に降ることを論じた。胤直はこれに従った。慶隆が家康に胤直の罪の宥されんことを懇請したが岳父に敵対したことを理由に宥さなかったという。

9月14日慶隆は美濃赤坂で家康に謁し、郡上・上ヶ根の戦闘報告をして東軍に参加した。

一方、稲葉貞通も15日関ヶ原で家康に謁し東軍側と戦ったことを詫び、長束正家が居城水口で籠城しているのを加藤貞泰らとともに攻める。

関ヶ原の論功行賞で稲葉貞通は豊後の臼杵50,000石に移封、そのあとに遠藤慶隆が郡上八幡城に入城し27,000石を領有し、12年ぶりに旧地を回復した。

この稲葉も加藤も犬山に籠もった武将である。東軍が本曾川を渡河し岐阜城を目指した時に、犬山は無視され戦わずして開城している。東軍が西軍の濃尾国境の拠点徹底攻撃していたら犬山に馳せていた武将らの近世大名として存続することは不可能であった。犬山城の各武将が西軍に見限りをし東軍へ傾斜していったことが根底にあったのではないだろうか。

<引用文献>

中島勝国『関ヶ原合戦と美濃・飛騨』22頁 岐阜県歴史資料保存協会発行 平成12年